

水温、塩分濃度は毎日午前10時頃測定した。

2 結果と考察

飼育結果及び水温を表-7、8、図-9に示す。塩分濃度は24.10～34.71‰（3月9日～12月23日）であった。

沖出し作業中の目立った斃死はなかった。

今回は沖出し尾数が少なく、収容尾数も異なる試験であったが、魚体の小型化に伴ない生残率の低下を示し、特に3区は悪い結果となった。また稚魚収容前日より夜間懐中電灯点灯の結果、各区共、昼間でも水面上から肉眼で確認できる程天然プランクトンの蝸集が認められ、3区を除いて、沖出し直後よりその周辺部でかなりの個体の摂餌行動が認められた。1、2、4区より7尾の稚魚を採捕し消化管内容物を検鏡したところ、全てに天然プランクトンが認められ、11mmサイズからは天然プランクトンの利用が期待できると思われた。

以上のことから、現段階では少なくとも11mmサイズに達して沖出しすることが望ましいと考えられるが、10mmサイズでの沖出し飼育技術の開発の必要性もあると思われた。沖出し後

表-7. 飼育結果-1 (マダイ)

試験区		1	2	3	4
開始時	月・日	4・28	5・2	4・27	5・2
	収容尾数(尾)	1,400	2,850	800	7,926
	平均尾叉長(mm)	12.5	11.1	10.0	11.1
中間測定	月・日	6・1	6・1	6・1	6・1
	飼育日数(日)	35	30	36	30
	生残尾数(尾)	891	1,054	119	3,154
	生残率(%)	63.6	37.0	14.9	37.9
	平均尾叉長(mm)	52.4	46.2	46.9	48.9
	平均体重(g)	3.3	2.3	2.1	3.1
備考		試験区5へ	試験区6へ	試験区5へ	試験区6へ

約1週間目よりほぼ毎日潜水し、稚魚の観察、斃死魚の除去、網掃除を実施した。潜水開始後より6月1日の中間測定時までの確認斃死魚数は1区27尾、2区409尾、3区11尾、4区125尾であった。いずれの区も斃死魚の大半は沖出し後約1週間以内であると推察され、収容尾数が少なく共喰いもほとんど認められなかったことから、今後この時期の斃死原因を明らかにし飼育技術の確立を図る必要があると思われた。

2試験区となって(試験区5、6)からの飼育結果を表-8、図-9に示す。

密度をほぼ1:2として飼育したが明確な差異は認められなかった。

試験区5では10月16日で平均体重97gに達した。

飼育期間中目立った大量斃死はなかったが、試験区5、6開始翌日、原因不明の斃死が5区10尾、6区23尾あった。斃死魚はいずれも体表に傷があり、生存している魚にも同様の傷を負った個体はかなり認められ、網外生物による食害と考えて2重網とした。それ以後斃死魚は減